

2016 年度 小委員会活動成果報告

(2017 年 2 月 2 日作成)

小委員会名	バイオクライマティックデザイン小委員会	主 査 名：齊藤 雅也 就任年月：2015 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	環境工学委員会 (熱環境運営委員会)	委員長名：羽山 広文 主 査 名：尾崎 明仁
設 置 期 間	2015 年 4 月 ～ 2019 年 3 月	
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 持続可能な都市・建築の実現に寄与するパッシブ要素技術のデータベース化 ・ 住まい手の環境調整行動を考慮した建築環境システムの評価手法の構築 ・ 地域気候に適した自然環境ポテンシャルの有効な活用策の検討 	
委員構成 (委員名 (所属))	委員公募の有無：有	
	主査：齊藤 雅也 (札幌市立大学) 幹事：高田 真人 (熊本大学) 委員：宇野 朋子 (武庫川女子大学), 金子 尚志 (滋賀県立大学), 菊田 弘輝 (北海道大学), 北瀬 幹哉 (環デザイン舎), 源城 かほり (長崎大学), 小玉 祐一郎 (エステック計画研究所), 宿谷 昌則 (東京都市大学), 菅原 正則 (宮城教育大学), 須永 修通 (首都大学東京), 築山 祐子 (旭化成ホームズ), 畑中久美子 (岐阜市立女子短期大学), 長谷川兼一 (秋田県立大学), 廣谷 純子 (みつデザイン研究所) (50 音順 敬称略)	
設置 WG (WG 名：目的)	環境適応モデル WG (委員 15 名)：温熱快適性の適応モデルは、人体-環境間の熱移動モデルに対し、環境実測に基づく実態調査を主体とする。これまで世界各地で実態調査、データベース化が進められ、温熱指標と比較することで、中立温度の季節変動、受容範囲の拡張などの新たな知見が得られてきた。しかし日本では、適応モデルに関する議論、調査データの蓄積は十分に行なわれてこなかった。そこで文献調査や実測調査によりデータを蓄積し、また議論を行い、寒暖・乾湿差がある日本の各地域に適用可能な適応モデルを提案する。	
2016 年度予算	165,000 円	ホームページ公開の有無：有 委員会 HP アドレス：http://news-sv.aij.or.jp/kankyo/s14/

項 目	自己評価
委員会開催数	4 回 (年度内計画を含む)
刊行物 (シンポジウム資料等は除く)	なし
講習会	なし
催し物 (シンポジウム・セミナー等) *能力開発支援事業委員会承認企画	なし
大会研究集会	なし
対外的意見表明・パブリックコメント等	なし
目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)	1. 前年度に開催した第 45 回熱シンポジウム「パネルディスカッション記録集」を作成し、今年度、小委員会ウェブサイト上で公開した。アドレスは以下。 (URL: http://news-sv.aij.or.jp/kankyo/s14/2015kumamoto_PD.pdf) 2. 小委員会を 4 回開催 (1 回は予定、環境適応モデル WG と合同) した。また、委員公募の結果、源城かほり (長崎大学) 委員が加わった。 3. 大会投稿時の細分類・細々分類について話し合った。環境工学委員会内の目標を同じとする他の運営委員会 (環境設計運営委員会) との連携を図る予定。
委員会活動の問題点・課題	本小委員会では、2015 年度に主催した熱シンポジウムの議題を振り返ると共に、4 年後の熱シンポジウム開催に向けて新体制の整備と新たな目標設定に当たった。主査・幹事をはじめ全国各地に委員が散らばっているため、通年の小委員会の配分予算の範囲内では委員旅費を工面するのが困難であった (幸い、今年度も、熱環境運営委員会の予算を融通いただくことで対応できた)。 次年度以降の対応策として、インターネット会議及びメール会議を実施する予定である。今後、再びシンポジウムや大会のオーガナイズドセッション等を企画していくにあたり、可能ならば、該当年度次においては小委員会の予算配分を幾分か割増し頂く措置を検討して頂きたい。

2016 年度 小委員会活動 自己評価

(中間年度評価)

総合評価 (4段階評価)	A	B	C	D
総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)	<p>本年度、当バイオクライマティックデザイン小委員会では、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 持続可能な都市・建築の実現に寄与するパッシブ要素技術のデータベース化 2) 住まい手の環境調整行動を考慮した建築環境システムの評価手法の構築 3) 地域気候に適した自然環境ポテンシャルの有効な活用策の検討。 <p>について活動した。</p> <p>計4回の小委員会では、傘下の環境適応ワーキンググループと共催で実施した。毎回、委員のそれぞれが話題提供を行い、事例や研究データを蓄積した。</p> <p>2016年度の特記すべき事項として、上記の1)～3)の活動を包含する形で、論文投稿時の細分類・細々分類について検討を行ない、小委員会としての草案を取りまとめたことが挙げられる。さらに、環境工学の分野内における横断連携による発展を見据え、他の運営委員会（環境設計運営委員会など）との連携をとる方針とした。また、今年度末で活動を終える「環境適応モデルWG」に引き続き、次年度から「熱環境適応WG」を立ち上げ、新たな委員を加え、小委員会との連携を強化していくこととした。</p> <p>2015年度に熊本県立大学で開催された「第45回熱シンポジウム バイオクライマティックデザインの視点から地域・都市・建築の環境を考える」のパネルディスカッション記録集を作成し、小委員会ウェブサイト上で今年度に公開した。（URL: http://news-sv.aij.or.jp/kankyo/s14/2015kumamoto_PD.pdf）</p> <p>2017年度は、大会学術講演会でのオーガナイズドセッション（以下、OS）で本小委員会から提案した「建築環境デザイン教育」「熱環境適応」の2つのOSを運営する。OSには他の関連する専門委員会への広報を積極的に行う。また、2016年度の活動を踏まえ、小委員会と新しいWGの連携をとって3年後の熱シンポジウムも見据えた議論を行う。</p>			

- 総合評価は4段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画・目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
 - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
 - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から 80%の達成度
 - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から 70%の達成度
 - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価・外部評価（シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など）に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。